

創作篇

濃霧

2

彼の犯罪

67

黒猫の眼

175

黒い扉

194

桐屋敷の怪事件

253

娣娥の冠

262

じょうが
かんむり

探偵小説通	298
云ふな、云ふな、それを云ふな	370
処女作の思ひ出	372
【編者解題】 横井司	374
松本泰書誌（未定稿）（横井司・編）	386

凡例

- 一、「仮名づかい」は、「現代仮名遣い」（昭和六一年七月一日内閣告示第一号）にあらためた。
- 一、漢字の表記については、原則として「常用漢字表」に従って底本の表記をあらため、表外漢字は、底本の表記を尊重した。ただし人名漢字については適宜慣例に従った。
- 一、難読漢字については、現代仮名遣いでルビを付した。
- 一、極端な当て字と思われるもの及び指示語、副詞、接続詞等は適宜仮名に改めた。
- 一、あきらかな誤植は訂正した。
- 一、今日の人権意識に照らして不当・不適切と思われる語句や表現がみられる箇所もあるが、時代的背景と作品の価値に鑑み、修正・削除はおこなわなかった。
- 一、作品標題は、底本の仮名づかいを尊重した。漢字については、常用漢字表にある漢字は同表に従って字体をあらためたが、それ以外の漢字は底本の字体のままとした。

創作篇

濃霧

(一) 若き日

その頃私は青春の若さと健康と富と自由とを所有した幸福な青年であった。私の後見人でもしかもただひとり生存いきのこっていた伯父は私が大学を卒業した年、突然脳溢血で死去なくなってしまったので、私は誰からも拘束を受けず、また誰の世話をする責任もない全く自由の身となった。その上両親から遺のこされた尠すくなからぬ財産の上に叔父の遺産が加えられたので生活の心配は少しもなかったのである。そんな訳で学友達は思い思いに銀行、会社にはいつてそれぞれそれぞれの職務に忙ひきこんで働いていたにも拘らず、私は自分の図書室に引籠ひきこって好きな読書に耽たつたり、広い庭園を逍遙しょうようしたりして何の屈託もなく一日を過していた。春から夏にかけて、よく山の手の邸宅からブラブラ銀座へ

出かけてきて、ゆきつけのレストランで夜食のあとにリキールのグラスを前におきながら、暮てゆく都大路みやこおおじの夜景色やいしよくを心ゆくばかり味つたり、そこに集ってくる友人達と賑かな雑談に夜の更けるのも知らずに時を過したものだ。しかし人間というものは凡てが満たされると更かにその上の不満不足を感じるものである。吾々が病気に罹かかったとき初めて健康の歎よろこびを知ると同様に物質的にも精神的にも何かしらそこに欠陥を見出して、それを埋みようとするとき、そこに希望が生れ、その希望によって吾々の生活が活気づけられるのである。私はようやく自分の周囲にある倦怠を感じ始めた。

日本という小さな舞台上に毎日水車みずぐるまのような単調な生活が続けてゆくのは私の耐え得るところではない。もう一つは私のただ一人の親友近藤君が某新聞社の特派員として渡英する事になったので、元来がコスモポリタンの傾向をもっている私は急に思立しりぞって、あるだけの財産を悉しつ皆金に代えて英イングランド国銀行へ預け入れ、飄然ひょうぜんとして日本を去ったのである。

倫敦ロンドンでは最初、美術家連の巢窟そくつである、チエルシーに住み、朝霧のかすむ堤エムバンクメント防からテムス川を隔てたB公園にかけて大分気に入っていたが潔癖な私は彼等の不整頓な生活に耐えられなくなつて間もなく倫敦の北西に

あたる閑静な高台の町へ移った。

その後の私の生活は転々として、倫敦を振出しにドーバ海峡を越えてバリイを訪ね、あるいはスイツルの湖畔に滞在し、さては地図上で欧羅巴の中心地と称せらるるボヘミアのプラハに赴いたものだ。麗らかな陽春の祭日には郊外の森と市街のあいだには絶間なくピクニックにゆく人達で埋つていた。萌黄、土耳其赤、緑色などの短い袴をつけた山岳地方のモラビアの異風異俗はどんなに若い私の好奇心を唆つたであろう。私はじきにそれ等の人々たちかづきになった。まだ恋を知らない私は紳士、淑女の間にまじつても至極率直で自由に振舞つたものだ。従つて異性に対しても、ほんの美しい花を見るほどの心持で何の悩みもなく快活に過ぐる日を送り、来る日を迎えていた。読者よ、このままいつまでも私の上に麗かな太陽が照つていたなら恐らく数年のうちには、誰人にもありがちな止みがたき懐郷の念にかられて、桜の咲く日本の土地へ帰つてしまい、この物語を書く機縁にも会しなかつたであろう。幸か不幸か、それは別問題として健康をもつて誇る若い私は首府プラハに滞在中のある日、突然病魔の襲うところとなつた。その日は烈しい酷暑であつたに拘らず、私の背部は妙に悪寒を覚えていたが、前夜の芝居帰りが遅かつたので、多分寝不足のせいであろう

と、たかをくくつて格別気にもとめずに外出して一二の用事を済ませ、公園前の広場を横切つてゆくと不意にグラグラと眩暈がして危く倒れかかつた。私は懶い手を伸して顛顛を触つてみると汗に塗れて額がヒヤリと感じた。空は群青を塗りつぶしたように碧く、遠くにボツサリと垂れ下つた街樹の下に穢汚しい小児達があちこち動いているばかりで、その他には生きたものは小犬ひとつ見えなかつた。

私はどうして旅館へ辿りついたか少しも記憶していない。赤と白のんだら染の日よけをはつた正面の玄関をはいつて自分の部屋の扉に手をかけた事を微におぼえているばかりである。

フト気がつくると私の周囲には入かわり立かわり人々が来て聴取れない錆のある声で何事も囁合つている。

「病院に収容されているのだ」と私はすぐ気づいたが、どうした事か深い霧のなかに閉じこめられているようで、何ものも見えない。私はその由を訴えると若い声の人が変則な英語で、「心配する事はありません。熱のために身体がひどく衰弱したからです。健康が恢復すればよきよくなりませよ」と親切にいった。そして倫敦から日本人の友達がきて附添つているが先刻町へ出ていったけれども間もなく戻つてくるといった。

「近藤がきてくれたか」と私は直覚した。友誼に厚い近藤でなくて誰が貴重な時間を費して、こんなところに来てくれよう。医者 of 語るところに依れば伯林の病院だということではないか。そして私がこの病院に運ばれてから二週間になるといではないか。五分十分のあいだに、元気のいい、聡明な近藤が戻ってくるに違いない。そうすれば、どうしてプラハから伯林へつれて来られたか、あと始末はどうなったか、総てが明瞭になる。そんな事を思っているうちに私は疲労れて、いつか昏々眠りに陥ちた。

(二) 第一の不幸

昼であるか夜であるか、闇の世界に目をさますと誰か私の額にじつと手をあてている。

「近藤君か」

「そうだ、近藤だ、気分はどうだね」

「ああ、何ともないようだ。一体私はどうしたというのだろう、誰がここへ連れてきたのか、そして私がかここにいる事をどうして君は知ったのか」

「君はね、プラハである地方特有の熱病に冒されて、

ホテルへ戻るなり卒倒してしまったのだ。ホテルの支配人から僕は電報を受取ったのさ」

「それで君は来てくれたのだね」といつて私は彼の手を堅く握りしめた。近藤は予てから独逸の医学に多大の信仰を持っていて病気になったら何でも独逸の医者にかからなくてはうそだというのが彼の持論であった。それ故彼はプラハから汽車に乗せてこの伯林へつれてきたのであるうと私は察した。

「もう安心だ。何といつても院長はこの国でも一流の大家だからね」

「病院へきてから二週間も経過つているというがその間私はどうしていたのかね。いくら熱のせいだといつても目が見えないとは思議じゃないか。どうだい、僕の顔付は酷く痩せかけているだろうか……君どつちが窓になつているのだね」

「君の右上部が窓でその外がすぐ芝生になつているのだ、それ町の音が響いてくるだろう、W通りはこの後方になつているのだ」

私は窓らしいと思う方に首をむけて、見えない目を睜りながら耳を澄すと一種沈滞したような市街の雑音や、自動車の駛る音などが聞えてくる。近藤は定めし私の傍に立つて、憐むように私の様子をじつと見下していたに

違いない。二人の間に沈黙が永く続いた。私はその間に過去すき去った華かな、さまざまの記憶を思出して今更ながら暗然と涙をのんだ。

そのような陰鬱な日が数日続いた後、私はいよいよ三人の博士の立会の下に周到精密な診察をうけたが強度の発熱のために脳神経を冒された私の視力は全然回復の見込がないと宣告を下された。二十五歳になつたばかりの青春の希望に満ちた私の前途は夢幻ゆめまぼろしの如く掻き消されてしまったのである。闇夜あんやに灯ともを失つたといおうか、絶望という恐ろしい言葉は殊更に私のために造られたものとさえ思われた。

一日一日と私の健康が恢復するにつれ、私の意識が明瞭になつてくるに従つて、失明の悲哀かなしみは一層深くなつていった。さはいえ絶望という診断を下されていつまでも病院にいる事はない。近藤に扶たすけられて、不安な汽車と汽船に揺られながら再び二年ぶりで倫敦の土を踏む事となつた。

かくして結城良彦ゆうきよしひこなる私はビクトリア街の自由党倶楽部クラブの附属ホテルの三階に部屋を借りて当分の宿とする事になつた。このように私はかつて見た事もない部屋で近藤の紹介で雇と入れたトムという老人をたよりとして、あじきない生活を始めたのである。勿論近藤は一日の仕事

を終ると第一に私の許へかけつけて、平生いっしょの元気のいい調子で何くれとなくその日の出来事を話してくれる。トムも老人らしい嗶々せせした声で覚束おぼつかな発音で新聞などを読んでくれるが時々判らない文字に出会うと綴字をいつて判読を私に任せるほどで自劣じれつたい体たいことがしばしばあつた。読者よ、知らぬ異郷に突然の奇禍によつて失明した青年が不知不案内の環境のうちに永い一日を暮している心持を想像するに難くはないであろう。初のうちは廢疾者である身を氣遣つて引籠り勝であつたが次第に耐えきれぬ寂寥せきりょうと倦怠が私の上に襲うてきた。近藤は特別の避け難き用事のない限り毎夕のように訪ねてきて時には私の手をひいて、チームスの堤エンバウクラント防から地下鉄道の停車場の附近を歩いたり、川岸からグラダラ上りの細い横町をぬけてストランドの大通りへ出たりしてS倶楽部で夜食を共にする事などがあつた。それがどんなに私の単調な生活に明るい光を与えたであろう。倶楽部の食堂に集つてくる人達は主として創作家や音楽家、美術家等であつた。近藤の紹介で隔意なく打解けて握手をしにきたり、心から同情のある言葉をきく度に私は異国にある身を忘れもう一度華かな昔の心に立かえるのであるが同時にそれ等の親切な人々の顔を見る事の出来ぬ不幸を一層痛切に感じさせられた。

近藤はどうかして滅入勝めいりかちな私の心を引立ようとした。彼は退屈ほど人間を惨めにするものはない、何でも考え込む暇のないほど忙しくするに限るといつて盲啞もうあ学校の先生を頼んで点字の練習させる事や、籐とうで籠かごなどを編む事を学ぶようにすすめたりした。私も点字を覚えたら自分で読書する楽しみが出来るからと思つて手さぐりで紙の上に浮出したポツポツを頼りにABCから勉強しはじめた。それから籐とうでまるい籠かごを造つたりした。近藤は時々それ等の製品を見ては、

「おい君、随分すさまじい籠が出来上つたね」と不器用な出来栄できばえを笑つたりした。私もそんな時は思わず声をあげて笑うのであつた。

(三) 奇禍

やがて夏もそろそろ終りを告げて秋の薄ら寒い風が朝夕の身に感じるようになった。ある日の午後、私は点字の勉強にもバスケットの製作にも飽き飽きして窓に近い椅子に腰をかけながらボンヤリとウエストミンスター寺院の時計の鐘をきいているところへ近藤が訪ねてきた。

「君、困つた事が出来たんだ。今朝本社から電信がき

て、ヴェニスに開催される海員会議へ通信員として派遣される事になつたんだが」

「それはいい、いつて大に腕をふるい給え」

「そんな事が出来るものか、君を残してゆくなんて」

「馬鹿な事を、僕はこの頃では手探りで大概の用は出来るし、それにトムもついているのだから安心してい給え。三箇月位わけなく経過たつてしまふよ。却つて珍しい土産みやげがきかれて楽しみだ」と私は云つた。実をいうと彼のヴェニス行は私にとつてこの上もない大打撃である。

何故なれば彼の存在は私の暗い生活のただ一つの光明であつたからである。しかし自分の我儘ばかりとおす訳はゆかぬ。私は親友の前途を思つて自分の感情を押し強く強て彼のヴェニス行をすすめたのである。それから三日目に彼はあとに心を残しながら、チャリנקロス駅チャリからたつていった。

近藤が去つた後の私の生活は予想以上に寂寥を極めた。今までは朝起きるともう一日の過程プロセスのうちに近藤が夕方訪問してくれるという楽しみを持つていた。そして籠をこしらえる間も、点字の練習をする間も楽しい賑うらやかな夕ゆふの近づくのを心待ちにしたものだ。しかしもう近藤は去つてしまつたのだ。私は折々トムの手引で近所を散歩しているうちに大分その辺の様子が判つてきた。ホテルの